

2024年4月7日
宮崎中部教会主日礼拝
牧師 乾元美

イザヤ書 65 : 24

コリントの信徒への手紙二 1 : 18~22

「アーメン」

(ハイデルベルク信仰問答 祈りについて 問 129)

※信仰問答は「日々の祈り」をご覧ください。

【招詞】 イザヤ書 35 : 1~2

【讚美歌】 27 「父、子、聖霊の」

【詩編交読】 詩編 38 編

【赦しの宣言】 イザヤ書 55 : 7 「主に立ち帰るならば、主は憐れんでくださる。

わたしたちの神に立ち帰るならば／豊かに赦してくださる。」

【讚美歌】 351 「聖なる聖なる」

【祈祷】

【聖書】 イザヤ書 65 : 24、コリントの信徒への手紙二 1 : 18~22

【説教】 「アーメン」

<アーメン>

これまで『ハイデルベルク信仰問答』から、聖書の御言葉に聞いてきましたが、それも今日で最後になります。今日は、「主の祈り」の最後の言葉、「アーメン」です。

「アーメン」という言葉を、わたしたちは、どのような祈りの最後にも唱えます。また、信仰告白を告白する時も、必ず最後に「アーメン」と言います。

この「アーメン」というのは、どういう意味の言葉なのでしょう。

今日の信仰問答の間 129 には、このようにありました。

問 129 「アーメン」という言葉は、何を意味していますか。

答 「アーメン」とは、それが真実であり確実である、ということです。

…まず、答えの最初にあるように、「アーメン」はヘブライ語で、真実であり確実である、という意味です。「まことに」とか「然り／そのとおり」ということです。

旧約聖書の時代から、ユダヤ人たちは、誓いに対する応答や、賛美の後や、礼拝の祈祷、祝祷の後に、声を合わせて「アーメン」と唱和していました。

また、それぞれ個人では、自分の言葉が真実であることを、自分で保証する時に、「アーメン」と言っていたようです。

福音書では、イエスさまが大切なことを語られるときに、「はっきり言うておく」と言われました。この「はっきり」と訳されているのが、「アーメン」という言葉なのです。

<何の確かさ？>

わたしたちは、祈りの最後に、この「アーメン」という言葉を口にします。「まことです。真実です」「确实です。確かです」と。

でも、わたしたちの場合は、自分の祈りの言葉が確かであることを、自分で保証するために、「アーメン」と言っているわけではありません。

わたしたちは、自分の口の言葉が、いつも不確かで、偽りの多いこと。自分の心の思いが、真実とはほど遠く、不誠実で、揺らぎやすいものであることを知っています。

わたしたちは、自分で自分を保証できるほど、信頼できる者ではないのです。弱く、罪深く、揺らぎやすいのです。そのことは、よく知っていなければなりません。

でも、だからこそ、わたしたちが、「アーメン」というのは。「確かです」、「まことです」、「真実です」と信頼を置くのは。他でもない、神さまに対してなのです。

神さまが、真実なのです。神さまが、まことなのです。神さまが、確かなのです。

だから、わたしたちは、自分が不確かで、弱くて、どうしようもなくとも。神さまの、確かさと、強さと、御力に頼って、祈ることが出来るのです。

祈り求める者が弱くても、祈りを聞いてくださる方が強くて確かなら、大丈夫なのです。

そして、そのように、父なる神さまが、まことに真実なお方であり、確かなお方であるということ、わたしたちに示してくださったのが、神の御子イエスさまなのです。

ですから、わたしたちは、イエスさまによって、はじめて「アーメン」という言葉を、心から唱えることが出来るようになるのです。

<然り>

先ほど読まれた、コリントの信徒への手紙二1：20には、こうありました。

「神の約束は、ことごとくこの方において『然り』となったからです。それで、わたしたちは神をたたえるため、この方を通して『アーメン』と唱えます。」

ここにある「神の約束」とは、旧約聖書の時代から、父なる神さまが、イスラエルの民を通して約束されてきたことです。

それは、地の果てまで、すべての人間を祝福し、罪から救う、という約束でした。

「罪」とは「的外れ」という言葉です。神さまに造られたわたしたちは、本来、神さまという的に向かって、生きるべき存在です。神さまの御心に従って、神さまを愛し、隣人を自分のように愛して生きるべき存在です。

それなのに、その的を外して、神さまの御心に背き、神さまから離れ、神さまを愛することも、隣人を愛することもできなくなっている。自分の思いに従って、自分のために生きようとして、奪い合い、傷つけ合い、悲惨に陥っている。的を外して、神さまから離れ、闇の中をさまよっている。

それが、罪の中にある、わたしたちの姿でした。

でも、父なる神さまは、そんな人間を、わたしたちを、お見捨てにはなりませんでした。いや、見捨てないどころか。お造りになったわたしたちが、どんなに不誠実で、どんなに罪深くて、どんなに神さまの御名を汚したとしても。

神さまは、わたしたちのことを、愛し続けてくださり、誠実でい続けてくださり、心から憐れんでくださった。だから、わたしたちを罪から救い、祝福を与えることを約束してくださった。それが、神さまの「真実」なのです。

そして、コリントの手紙では、「神の約束は、ことごとくこの方において『然り』となったからです」とありました。「この方」こそ、父なる神さまが、約束を実現するためにこの世にお遣わし下さった、神の子イエス・キリストなのです。

神さまの約束は、ことごとく、すべて、イエスさまによって、「然り」となりました。

「然り」とは、「そのとおり」と肯定する言葉、「よし」、「Yes」、という意味です。

神の御子イエスさまが、神さまの救いの約束を、然りとしてくださった。そのとおりに、確かに、本当に、実現してくださったのです。

神の御子イエスさまは、この世に来られ、まことの人となって十字架に架かり、わたしたちの罪をすべて引き受け、ご自分の命を、罪の償いとしてくださいました。

そして、死者の中から復活し、わたしたちに、神さまと共に生きる永遠の命と、復活の約束を与えてくださいました。

わたしたちに、神さまが約束してくださった祝福を、与えてくださいました。

この、イエスさまの救いの御業によって、わたしたちは、神さまの愛が確かであること。罪の赦しが確かであること。命のご支配が確かであることを、示されたのです。

神さまに背き、逆らい、罪に陥り。神さまの御前に出れば、「否」と退けられるはずだったわたしたちは。イエスさまによって、罪を赦され、新しい命を与えられ、神さまの御前で、「然り」、「よし」とされる者となったのです。

…神の約束は、イエスさまにおいて「然り」となりました。わたしたちは、イエスさまにおいて「然り」とされました。

このことは、真実であり、確かであり、まことです。だから、わたしたちは、イエスさまを通して、「アーメン」と唱えることが出来るのです。

<「アーメン」である方、真実であられる方>

ですから、ヨハネの黙示録では、イエスさまのことを、このように呼んでいるところがあります。

「アーメンである方、誠実で真実な証人、神に創造された万物の源である方」(3:14)。まさに、イエスさまご自身が、「アーメン」と呼ばれているのです。

そうであるならば、わたしたちが、「アーメン」と唱える時、それは、イエスさまのお名前そのものを、唱えているのと同じです。そして、イエスさまのお名前を唱えているということは、そこに、イエスさまご自身が、共にいてくださる、ということなのです。

このお方の真実に寄りかかって、わたしたちは祈るのです。

わたしたちの祈りは、わたしたちの信仰の確かさとか、信じる思いの強さとか、願う熱心さとか、そのようなものに基づいているわけではありません。

問 129 では、引用聖句の一つに、テモテへの手紙二 2 : 13 があげられています。

そこには、こうあります。「わたしたちが誠実でなくても、／キリストは常に真実であられる。キリストは御自身を／否むことができないからである。」

わたしたちは、どんなに心がけても、誠実を貫くことが出来ません。心は弱く、疑い深く、熱心さは、いとも簡単に消え失せます。

しかし、わたしたちの救い主であるキリストは、神の御子イエスさまは、常に真実であります。

この方が、共にいてくださるから。この方が、罪を赦し、命を与え、父なる神さまの御許へと、導いてくださるから。この方が、わたしたちを「然り」としてくださるから。この方が、わたしたちをご自分のものとしてくださるから。

この方の真実によって、この方の真実に包まれて、わたしたちは父なる神さまに、安心して、信頼して祈り、「アーメン」と唱えることができるのです。

「アーメン」の一言を言うとき。わたしたちは、そこに、わたしたちを「然り」とするために、十字架に架かり、復活し、神の約束を実現してくださったイエスさまが、共に立ってくださっていることを、いつも覚えたいのです。

<はるかに確実に>

そして、『ハイデルベルク信仰問答』は、この祈りの確かさを、もっと突っ込んで表現しています。問 129 の答をもう一度読みます。

答 『アーメン』とは、それが真実であり確実にある、ということです。

なぜなら、これらのことを神に願い求めていると、わたしが心の中で感じているよりもはるかに確実に、わたしの祈りはこの方に聞かれているからです。」

先ほど、わたしたちは、自分の弱さ、不確かさ、疑い深さを知らなければならない、ということを申しました。

しかし、神さまの真実さと確かさのゆえに、祈りは確かに聞かれます。わたしたちを「然り」としてくださった、イエスさまにあって、祈りは確かに届きます。

わたしたちはそう聞いて、安心し、胸をなでおろし、祈りの確かさに、心を強められたのではないのでしょうか。

しかし、現実には、わたしたちの心に与えられた、そんな確かさよりも、はるかに確かに、わたしたちの祈りは、神さまに聞かれている、というのです。

わたしたちの心の確信なんかを、はるかに大きく超えたレベルで、神さまは、確実に祈りを聞いてくださるといいます。

これも問 129 の引用聖句ですが、旧約聖書のイザヤ書 65 : 24 には、こうありました。

「彼らが呼びかけるより先に、わたしは答え／まだ語りかけている間に、聞き届ける。」

神さまは、わたしたちが呼びかけるより、ずっと前から、わたしたちを見つめ、耳を傾け、語りかけ、そして答えてくださっています。神さまは、わたしたちが語りかけている間に、それが言葉にならないうちに、もう聞き届けてくださっています。

イエスさまは、「主の祈り」を弟子たちに教える前に、このように言われました。「あなたがたの父は、願う前から、あなたがたに必要なものをご存じなのだ。」(マタイ 6 : 8)

…わたしたちが、自分のために、これが必要だ、あれが必要だ。そう思い、願うよりもずっと先に。わたしたちをお造りになった、天の父なる神さまは、わたしたちに必要なものを、すべてご存知なのです。わたしたち自身よりも、天の父なる神さまは、わたしたちのことを深くご存知なのです。

この方が、わたしたちが呼びかけるより先に、答えてくださっている。まだ語りかけている間に、聞き届けてくださっている。

…神さまは、わたしたちが、必死で呼びかけなければ、熱心に願わなければ、振り向いてくださらない、答えてくださらない方ではありません。

むしろ、神さまの方から先に、わたしたちを見つめ、耳を傾け、御手を差し伸べ、良いものを与えようとしてくださっている。神さまの方から先に、わたしたちを呼んでいてくださる。そして、わたしたちが答えることを、わたしたちが神さまを呼び、祈り、求めるようになることを、忍耐強く待っておられるのです。

わたしたちが、神さまを呼び、祈るならば。わたしたちは、すでに、ずっと前から、神さまの愛の眼差しの中に、救いの御手の中に、恵みのご支配の中に、置かれていた、ということを知りましょう。

そのような方が、わたしたちの父なる神、わたしたちが祈る相手なのです。

だから、わたしたちは安心して、確信をもって、信頼して、祈ってよい。心の内を何でも申し上げ、打ち明け、すべてを願って、すべてを頼って、祈ってよいのです。

<慰めに生きる>

さて、このような神さまが、わたしたちの父なる神さまである。わたしたちが、罪の悲惨から救われ、イエスさまのものとされ、このような神さまの子どもとされている。だから、感謝をもって祈ることができる。確信をもって「アーメン」ということができる。

このことこそ、生きるにも死ぬにも、わたしたちのただ一つの慰めです。

『ハイデルベルク信仰問答』の間1は、このような問答で始まりました。

問1 生きるにも死ぬにも、あなたのただ一つの慰めは何ですか。

答 わたしがわたし自身のもではなく、体も魂も、生きるにも死ぬにも、わたしの真実な救い主、イエス・キリストのものであるということです。

そして、『ハイデルベルク信仰問答』の最後の問答は、「アーメン」です。

まさにこれは、「主の祈り」の最後というだけでなく、信仰問答全体に対する、最後の「アーメン」とも言えるでしょう。

『ハイデルベルク信仰問答』は、全体を通して、この、ただ一つの慰めを、教えてきました。「わたしがわたし自身のもではなく、体も魂も、生きるにも死ぬにも、わたしの真実な救い主、イエス・キリストのものであるということ」。これが、わたしのただ一つの慰めである。

わたしたちは今、これに心から、「アーメン」、「真実です」、「そのとおりです」と言いたいのです。

わたしの不確かさにも関わらず、わたしの弱さにも関わらず、わたしの罪深さにも関わらず。わたしたちは、常に真実であるイエスさまのものとされています。この方によって、わたしたちの祈りは、心に思うよりもはるかに確実に、聞かれています。

ですから、わたしたちは、神さまにすべての栄光を帰し、心からの賛美をささげ、こう唱えるのです。

「国とちからと栄えとは、限りなくなんじのものなればなり」。「アーメン」。

<われらの祈り>

さて、最後に、わたしたちは「主の祈り」が、「われら」の祈りである、ということを感じておきたいと思います。

「天にましますわれらの父よ」で始まる「主の祈り」は、常に一人称が「われら」、「わたしたち」でした。

この祈りは、イエスさまが、弟子たちに、教会に、教えてくださった祈りです。今日もわたしたちは、神さまの御前で、一つになって、声を合わせて祈ります。

もちろん、「主の祈り」は、一人で祈ってもよいのです。

しかし、わたしたちが教会で、共にこの「われら」の祈りを祈るとき。その祈りの中には、共に、イエスさまのものとされた兄弟姉妹がいること。そして、共に、神の約束に招かれている、神さまに愛されている、世のすべての人々がいることを、覚えたいのです。

ある神学者は、「主の祈り」は「世界を包む祈り」だと言いました。「主の祈り」は、世界のすべての人に必要な祈りであり、世界のすべての人を慰める祈りなのです。

わたしたちが、「主の祈り」を祈るとき。わたしたちは、ここにまだいない人々にも、御国が来ますように、御心が成りますようにと、祈っているのです。

わたしたちが「主の祈り」を祈るとき。わたしたちは、遠くの被災地や、戦争の中で、飢え渴いている人々のためにも、日用の糧が与えられますようにと、祈っているのです。

そして、いつかこの「主の祈り」に、誰か一人でも新たに加えられたなら。それはまさに、その人に神さまの御国が来て、そこに神さまの御心が成った、ということなのです。

ですから、「主の祈り」は、すべての人々のための、執り成しの祈りでもあります。

そして、それは一方で、わたし自身が祈れなくなるときも。この「主の祈り」の「われら」には、このわたしも含まれている。祈られている。執り成されている、ということなのです。

ですから、世界の、すべての教会で祈られている「主の祈り」では、この、わたしのことも、祈られている、ということになります。

そして、わたしが祈る「主の祈り」には、世界のすべての人々のことが、含まれているのです。

この、途方もなく大きな広がりを持つ祈り。また、一人一人の心に深く染み入り、助け、導き、慰める「主の祈り」を。教会は、イエスさまに教えていただいてから、ずっと祈り続けているのです。

そして、終わりの日が来るまで。すべての人が、神さまを「わたしたちの父なる神よ」と呼ぶ日まで、祈り続けていくのです。

そして、わたしたちは、確信をもって、「アーメン」と唱えます。

神さま、あなたは確実に、この祈りを聞いてくださいます。わたしたちの思いよりも、はるかに確実に、この祈りは聞かれています。わたしたちが誠実でなくても、真実なキリストのゆえに。わたしたちが、イエスさまのものとされているゆえに。天の父なる神さま、生きるにも死ぬにも、あなたの慰めが、いつもわたしたちと共にあります。「アーメン」。

【お祈り】

天におられる、わたしたちの父なる神さま 御名を賛美いたします。

『ハイデルベルク信仰問答』を通して、毎週、御言葉を聞いてまいりました。

父なる神さまに愛され、聖霊を与えられ、生きるにも死ぬにもイエスさまのものとされている、この慰めを、心から感謝いたします。

あなたの愛も、憐れみも、約束も、救いの恵みも、すべて真実であり、確実であり、アーメンです。

ただ、あなたの確かさに、依り頼ませてください。聖霊なる神さまが、わたしたちを導いてください。御子イエスさまの真実によって、わたしたちを支えてください。

そして、わたしたちが、すべての栄光をあなたに帰し、あなたの御名を永遠に賛美して、喜びのうちに歩いていくことが出来ますように。

わたしたちの真実な救い主、イエスさまの御名によって祈ります。アーメン

【讚美歌】 4 4 7 「神のみこころは」

【信仰告白】 ニカイア信条

【聖餐】

【讚美歌】 7 6 「今こそ歌いて」

【十戒】

【献金】 6 5 - 1 「今そなえる」

【主の祈り】

【祈祷】

【讚美歌】 2 8 「み栄えあれや」

【祝福】 主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、

あなたがた一同と共にあるように。アーメン